

第9号



発行 檜山教職員組合

定価一年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む

〒043-0056 江差町字陣屋町 86-1
Tel 0139(52)0858 FAX (52)1490
発行責任者 石橋 英敏
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

2015檜山合同教育研究集会

この間、檜山合同教育研究集会が二回に渡って開催されました。

八月二九日の領域問題別集会では藤谷純子さん(上ノ国小)が、「今だから大切にしたい子どもから出発する授業」と題して全体実践発表を行いました(別項)。学



「学校のまなざし」でディスカッション 教科等集会の講演のなかで

級づくりや地域・保護者との関係づくり、教育困難、教育条件などで分科会が行われ、実態と課題、実践と取り組みを交流しました。学級づくり分科会では二〇代の若い先生が様子や取組を報告、子ども集団にどのようにかかわり、その自発性にどのように信頼を寄せていくべきかといったテーマで論議が掘り下げられました。固有の課題を背負う子どもへの対応や、子どもたちの成長発達が育まれる社会の在り方など、広い話題で論議が交わされました。



講演する谷先生

九月二六日の教科等集会は乙部小学校を会場に開催されました。北海道子どもセンターの谷光氏が「教室は世界とつながっている」と題して講演、現在向き合っている大学生の声を紹介しながら、「学校のまなざし」などで問題を提起しました。参加者は時折ディスカッションしながら一緒に考え合い、問題を掘り

下げました。(要旨別掲) 午後は七つの分科会に分かれ、レポート報告をもとに討議、実践や課題を深め合いました。「ことばと教育」では、言葉を読む意義と学習指導のねらい、読解と道徳など教科の本質や関連を探る議論が交わされました。「自然認識と教育」では、「折り」「筆算導入」「かけ算導入」「数図」など小学校低学年における算数指導の方法や工夫が話題になりました。理科分野では、「エネルギー学習の一環として「原子力」を考えさせる実践が報告されました。「社会認識と教育」「地域と教育」は合同分科会、講師の谷光氏も参加しました。「基本的人権」「平和」「日本国憲法」など人類的、国民的な課題を扱った実践報告を受け、討論を深め合いました。また、「稲からおにぎり」までの米作り実践や、地域社会に生きる卒業先輩との対面実践など総合学習の取組も紹介されました。文字通つなげる報告が相次ぎました。「表現と教育」では主に図工・美術教科での実

践が報告されました。実際に作品を見ながら、具体的に子どもの事実を踏まえたリアルな話し合いになりました。「身体と教育」は養護と保健に分かれての話し合い。養護分科会では健康安全をめぐる取組や性教育、個別支援、保護者連携など多岐に渡る話題で熱心に交流しました。保健分科会では運動障害を持つ子への対応や、子どもの興味関心を引き出す指導などで討論を深めました。「障がいと教育」では、子どもの特性と願いの理解に立った発達支援の在り方をめぐり、持ち寄った資料やレポートをもとに日頃の実践を交流しました。二回の集会を通して発表されたレポートは三二本となりました。また、八三名の参加者があ



意見を交わし合う参加者

子どもの事実から出発

「実践で大切にしたいこと」を語る 領域等集会で藤谷純子さん



「奥深い、間違い観」が豊かな授業づくりの源泉になっている」などの感想が出されました。

藤谷先生は、「多様なかわりの中で人は育つという思いがある」と述べ、生まれ故郷である奥尻のことや、後に機会を得て体験したカナダ研修のことなど、これまでの数々の出会いが自分の今に影響を与えてきたと振り返りました。普段の授業の様子を、画像や動画を使って紹介しました。創作表現活動で子どもと一緒に楽しむ風景などが映され、ほのぼのとした感興を誘いました。

間違いや失敗をいねいに取り上げながら、子どもたちの思考と活動を紡ぎ出していこうとする実践が印象深く語られました。また、言葉を使って自分を表現することを重視、自己の内面との対話を通して能動的に学習に向き合う子どもたちの姿が生々しくと伝えられました。

松山合同教育研究集会 講演要旨

教室と世界はつながっている

— 憲法・子どもの権利条約が息づく学校づくり —

谷 光(たにあきら) 氏

北海道子どもセンター運営委員

大学非常勤講師・元小学校教員



講演する谷光氏

問題提起の一つ目は、指導する側とされる側の感覚のズレはどこからくるかということ

子どもと教師のズレはどこから?

谷光先生は、①子どもと教師の応答のズレ②大学生と学んで③子どもが求める学びの柱を立て、参加者のディスカッションを取り入れながら講演しました。要旨を紹介します。

と。「傷害が?」「グレーゾーン?」という言葉が割合簡単に囁かれる現実がある。精神科医の田中康雄氏は「日常の中で『よりよく生きる』ことができればという意味で診断を活用したい」と述べているが、大切なことはその子どもがどんな子か判定することではなく理解すること。

の生き方が、応答不全を生みだし、もしかしたら知らず知らずに子どもの「心の叫び」を抑圧しているかもしれない。お互いの存在を肯定・承認し、「発達の糧」となる生活世界をどのように育んでいったらいいのだろうか?

大学生と学んで生きにくさの根源は?

もう一つは、子どもの行為とそれへの応答のズレ。例えば、「ノートを破る子」に対して「物を大切に」、「すぐ手を出す子」へは「暴力はいけない」などの対応が学童保育の中でも普通に。指導する側がそういう願いを持つことは間違いではないが、価値観を直接ぶつけてしまうことで、表面的な反省を引き出して終わることに。行為はその子の「呼びかけ」、行為の裏にある思い、声にならない声を聴き取ることが大切なのは。

「青少年の規範意識が低いので道徳教育の強化を」「権利ばかり教えると我が儘に、義務もきちんと教えるべき」「いじめるのは良くないが、いじめられる子も問題」「子

「きちんと」「ちゃんと」という指導の中で、子どもたちはどんな感情やストレスを溜め込んでいくのかを想起したい。自己責任の名のもとで強いられる「自律的個人」とし



問題提起を受けて意見交換

どもだからといって罰を軽くするのは問題、凶悪犯には厳罰を「教えるのがうまい先生とそうでない先生がいるので評価制度は当然」「体罰も時には必要」「憲法は国民一人ひとりが遵守する義務」などについて肯定する学生が半数以上を占める。その後の討論を経てそんなに変わらない。こうした学生の反応傾向をどう考えたらいいのか? 他者に対する攻撃的なまなざしを感じる。知らないうちに、社会に沈殿している「競争と自己責任」の雰囲気を取り込んでいるのだろうか?

- 傷つかないために 感じないこと
- 傷つかないために 見ないこと
- 傷つかないために 言わないこと
- 傷つかないために 聞かないこと
- 傷つかないために 望まないこと
- 傷つかないために 諦めること
- 傷つかないために 装うこと
- 傷つかないために 自分を見せないこと

という詩文がある。人間疎外が教育・子育ての世界まで広がっている現実を表現しているのでは。学生の多くもそんな世界を生きてきたのかも

「341」は必見。学生らは、意見を述べ合うこうした授業について「苦痛」という一方で、他者に次第に心を開いていく。そして「異質」との出会いや交流を厭わなくなる。子どもが子どもとして生きられる学校を。その中で子どもとともに学びほぐしていく。経験を大切にしたい。(終)

れない。教師自身が現場で息苦しさを抱えて生きている現実も指摘される。教師が自分の生きにくさに声を上げることは、子どもの人間回復を担う教師としての視点の回復のためにも不可欠のプロセス。一方で、現下の政治情勢の下、人間としての肉声を上げる学生や若者もいる。この実態をどう受け止めていったらいいのだろうか?

子どもが求める学びの柱をどう立てるか?



講演を聴く参加者